

## ジャッジの評価に関する数学的基準

—ISU コミュニケーション第 1631 号 II E)より—

### シングルおよびペア・スケートティング、アイス・ダンス、シンクロナイズド・スケートティング

#### E) 隠れている異状を見分ける為の数学的基準

以下の明確な数学的基準は理事会から承認されており、その目的は、任命された OAC のメンバーにより査定されるべき隠れている異状を見分けるためにある。

##### a) 要素部分の採点 (GOE)

i) 演技された各要素、セクションごとに、コンピューターが GOE の平均点を計算するが、その中にはパネルの全ジャッジの採点とレフェリーの採点とが組み込まれる。パネルが 7 人以上のジャッジで構成されている場合には、レフェリーの意見に大きなウェイトを置くために、レフェリーの採点を 2 倍とする。

OAC の評価の為に集計される平均点は、競技結果（演技の順位決定の範囲で）としてこれまで使われていた刈り込み平均の結果とは同じではないという点に注意されたし。

ii) 各ジャッジの採点に対して、コンピューター・プログラムは当該要素の平均点との逸脱を計算する。一つの要素でのジャッジの採点における逸脱は、ジャッジにより入力された GOE と当該要素の GOE の平均点との差の絶対値（すなわち正の値）であり、ここでは「逸脱度」と呼ばれる。全要素における逸脱度は、2 つの個別の合計に分けられる。すなわちプラス部分の逸脱度とマイナス部分の逸脱度である。

例: ショート・プログラム

	GOE の平均点	ジャッジ A の GOE	逸脱度
要素1	1.2	1	-0.2
要素2	-1.4	-2	-0.6
要素3	0.0	-1	-1.0
要素4	0.8	1	+0.2
要素5	-1.8	0	+1.8
要素6	0.2	2	+1.8
要素7	2.2	1	-1.2
	プラスの逸脱度		+3.8
	マイナスの逸脱度		-3.0
	総逸脱度		6.8

各ジャッジに対して、許容される総逸脱度のコリドーが計算される。この「コリドー」は、演技された要素の数が基礎になる。例えばショート・プログラムでは 7 つの必須要素が演じられる。各ジャッジの採点は、平均として各要素につき逸脱度 1 のずれがありうる。従って、ショート・プログラムでは 7 つの要素があり、（許容される）総逸脱度の最大は 7.0 となる。プラスとマイナスの逸脱度が加えられる。

上の例では総逸脱度の 6.8 は、許容された最大 7.0 の逸脱度のコリドーを超えていないので、これを異状として評価されることはない。

上記の例では、ジャッジの採点は以下ようになる。

プラスの逸脱度	3.8
マイナスの逸脱度	3.0
総逸脱度	6.8

同じ考えは、ショート・ダンス、フリー・スケートニング及びフリー・ダンスに適用される。多くの要素やセクションが演技され承認されれば、それに応じて多くの最大の逸脱度が受け入れられる。プラスとマイナスの逸脱度を加えることは、上記のように適用される。

b) プログラム・コンポーネンツ

各プログラム・コンポーネンツごとに、コンピューター・プログラムは、パネルの全ジャッジ、レフェリーそして OAC のメンバー（もしその現地にいれば）の採点を組み込んだ平均点を計算する。レフェリーの採点（個人の採点）と OAC のメンバー（もし現地にいれば）の採点はいずれも 1.5 倍される。フィギュア・スケートニング・グランプリ・イベントの各戦（ジュニアとシニア）及び、ISU ワールド・チーム・トロフィーにおいては、パネルが 7 人以上のジャッジで構成されている場合にはレフェリーの採点を 2 倍とする。6 人以下の場合には時は 1.5 倍とする。

5 つのプログラム・コンポーネンツのそれぞれについて、ジャッジのコリドーは、そのジャッジの採点と計算された平均点との間の 1.50 の逸脱度（コンポーネンツごとに最大 10 点の 15%）に基づく。つまり、5 つのプログラム・コンポーネンツでは（許容される）総逸脱度は 7.5 となる。プラスとマイナスの逸脱度は、差し引き相殺される。

例:ショート・プログラム

	コンポーネンツの平均点	ジャッジ A のコンポーネンツ採点	逸脱度
コンポーネンツ1	5.75	4.00	-1.75
コンポーネンツ2	5.85	4.00	-1.85
コンポーネンツ3	5.45	6.25	+0.80
コンポーネンツ4	6.00	7.75	+1.75
コンポーネンツ5	5.55	7.00	+1.45
プラスの逸脱度			-3.60
マイナスの逸脱度			+4.00
総逸脱度			+0.40

上記例では、ジャッジの採点は以下ようになる。

プラスの逸脱度	4.00
マイナスの逸脱度	3.60
総逸脱度	0.40

よって、総逸脱度の 0.4 は、許容された最大 7.5 の逸脱度のコリドーの範囲に充分入っているので、異状は無く、評価は不要である。